

「そんなじいは、ここの古むじなが、おれと組んだんだが、とうとう何回組んでも逃しつちまつたんだ。向こうさ行って、悪い事してんだな。そういうものは征伐せんにゃなんねえ」と言つて、村人の頼みを聴いて、雲と霞に乗つて人年貢あげんの間に合つた。じいん太郎が、人年貢を入れる桶さ娘の代りに入つていったんだ。そしたらその大きなむじなが来たつたんだ。

「じいん太郎はいねえか」とむじなはいつたが、蓋を取るまで黙つていたんだと。蓋取つたらじいん様は、「じいん太郎はここにいた」と言つて、組打ちしたんだと。格闘の末、むじなを倒したが、じいん太郎も死んだ。村人は、じいん太郎を神様に祀つた。

飯豊山のおふじは、じいん様恋しくて、会津街道通つて来たんだと。下江花つつ所まで来て病気になるつて、そんなじいあそこさ身隠したわけよ。雨嵐が来つと、じいん太郎が藤沼さ面会に来んだと。

じいん太郎が雨嵐に乗つて、藤沼に面会に来つと、藤沼の水がたつぷりと溜るといつてる。村の人はじいん様が来つと、強飯や餅をつけて持つて行って上げんだと。その餅がなくなんだとよ。

おふじつてのは、きれいな女であつただけど、神様になつて蛇体になつたんだとよ。あそこでは藤の花は取らねえつうわけだ。じいん様が来つと、こけ(鱗)が、蛇のこけだよ。小っちゃなピカピカ光るのを落して行くんだと。

水が干けると、「行がさつた」といつて、村の人たちは、「こけ」拾いに行くんだ。この「こけ」は高価なものなんだ。子どもの虫病したときそれ一つ飲むとよくなるんだと。またいろいろの御利益があるんだとよ。